



平成25年1月29日
内閣府（防災担当）

南海トラフの巨大地震モデル検討会（第30回）及び 首都直下地震モデル検討会（第12回）合同会議 議事概要について

1. 検討会の概要

日時：平成24年12月28日（金）15:00～17:00

場所：中央合同庁舎第5号館 防災A会議室

出席者：阿部座長、今村、入倉、岡村（眞）、岡村（行）、金田、佐竹、平川、平原、福和、古村、室崎、山岡、山崎の各南海トラフの巨大地震モデル検討会委員
阿部座長、今村、岩田、岡村（行）、佐竹、武村、平田、福和、古村、山崎の首都直下地震モデル検討会委員
及び、佐々木大臣官房審議官 他

2. 議事概要

最大クラスの強震断層モデルの長周期地震動の計算手法について事務局から説明を聴取し、委員間で議論を行った。今回の議事の概要は次のとおり。

- 浅い地盤構造モデルを構築する時のメッシュサイズの違いによる各地点の震度増分の違いは重要である。過去地震の震度分布を再現する際の注意点として、最終的に250mメッシュで計算するのであれば、250mメッシュで構築した浅い地盤構造モデルで過去地震の震度分布を合わせ込み、その再現したモデルを用いることが必要。
- 同一座標に複数本のボーリングデータが登録されているものも、データとしては使う方が良い。ビルの建設工事の際のボーリングデータのようなものは一番深くまであるデータを代表として用いると良いのではないか。
- 大正関東地震、元禄関東地震の際には、プレート境界から地表に向けて延びた分岐断層と考えられる神縄・国府津－松田断層は動いていない。しかし、関東地震の想定では、分岐断層も動く場合とプレート境界だけが動く場合の2つを考える必要がある。
- 相模トラフ軸より南側は全体がフィリピン海プレートというイメージであり、その下にさらにプレート境界があるというのは地質構造には合わない。現在、プレート境界として考えているものは、運動境界ではなくフィリピン海プレートの基盤ではないか。
- 関東地震の震度、津波を説明する断層を考え、プレート面の設定も考えるとのことだが、震度分布から断層面を細かく決めることは出来ないので、地殻変動から断層面を設定するしかない

のではないか。

- 波形計算におけるSV波がクリティカルアングルを超えた場合の処理については、観測例はクリティカルアングル以下になっていることから、入射角を強制的に下げるほうが実態に合うと思う。
- 津波の再現計算においては、東北地方太平洋沖地震は局所的な津波が生じたので、海溝軸付近の浅部のすべりを入れないと再現できない。一方、南海トラフ沿いの地震でそれが生じたかどうかは明確でない。浅部のすべりを入れた場合と入れない場合の2通りのインバージョン結果をみるとその影響が表れている。四国においては浅部のすべりを含めた場合と含めない場合にさほど差がないことから、おそらく生じていないのではないか。一方、東南海辺りではその影響が大きいことから、今後の議論のポイントになる。
- 南海トラフの過去地震で志摩半島の付近の津波が高くなりすぎたり、低くなりすぎるという問題は、的矢湾のように入り組んだ地形の効果があらわれているのであれば、逆に良い計算をしているともいえる。ただし、志摩半島も太平洋に直接面しているところは津波堆積物の痕跡から見て過去の津波高は高い。
- 元禄関東地震の津波の再現計算の結果、相模湾の中の津波高が行谷モデルに比べて高くなっているのは、計算で用いたフィリピン海プレートの沈み込みの位置、角度、深さの違いによるものではないか。

<本件問い合わせ先>

内閣府政策統括官（防災担当）付

調査・企画担当参事官 藤山 秀章

同企画官 若林 伸幸

同参事官補佐 下山 利浩

TEL : 03-3501-5693（直通） FAX : 03-3501-5199